

子どもは家庭においていかにして自分の体温を測っていたか How did children measure their body temperature in their daily lives

伊藤 崇[†]

Takashi Ito

[†]北海道大学

Hokkaido University

tito@edu.hokudai.ac.jp

概要

電子テクノロジーにより、子どもが自分で自分の身体を計測すること可能となる。新型コロナウイルスの流行にともない、家庭での子どもの日常生活に検温実践が組み込まれた。7歳から9歳の子どもがいる3つの家庭の生活を撮影した映像を観察したところ、検温が毎日のルーティンに組み込まれ、円滑に遂行されていた様子が見られた。具体的には、体温計や記録簿のある場所の身体化、および検温をめぐる親子の協働が観察された。

キーワード: 子ども, テクノロジー, 日常生活, 体温測定, 新型コロナウイルス

1. はじめに

子どもの日常生活に遍在するセンシングデバイスなど電子テクノロジーによって、子どもの様々な側面がデータ化されている。そうしたデータは社会が子どもを理解する際のリソースとなると同時に、子どもが自身を認識する際の情報にもなる。したがって、現代の日本社会における子どもの認知発達を明らかにするためには、様々な電子テクノロジーと子どもの結びつきという観点が不可欠である (伊藤, 2023a)。

電子テクノロジーを通して容易に指標化される側面として、子どもの身体的・生理的特性がある。例えば体重や身長は家庭内や学校制度において子どもの成長発達を可視化するための重要な指標として利用される。そのときデジタル体重計のようなテクノロジーは大人や子どもにとって子どもの特性を数値で置き換えるための手段となる。

体温もまた人間の健康状態を推測する主要な指標の一つであり、その測定を可能にする電子テクノロジーの一つに電子体温計がある。

電子体温計の普及により、家庭や医療機関での迅速で簡便な体温計測が可能となっただけでなく、従前の水銀体温計のようなアナログな指標の読み取りという人間の認知的負荷を軽減させた。電子体温計で測定、表示されるデジタル的な数値は、体温計測という専門性を大衆化させるのに役立ってきた。すなわち、誰でも自

他の体温を読み取ることができるようになったのである。このことは、子どももまた、電子体温計の普及により、自己を体温という側面から理解できるようになったことを意味する。

子どもの日常的な体温の測定が日本全国の大人や子どもにとって関心事となった出来事が、新型コロナウイルスの蔓延という事態であった。それまでは、体調の悪いときなどまれにしか家庭に存在しなかった、毎日の体温測定実践が強制的に導入されたのである。

感染予防目的で2020年2月から全国的に休校措置がとられて以降、文科省から各種学校に通知されたガイドラインやマニュアル (文部科学省, 2020a; 2020b) により、保護者や子どもは毎朝体温を測ることを余儀なくされた。この実践は2023年5月に「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の変更により新型コロナウイルスの分類が5類感染症に変更されるまでの約3年間続いた。

子どもの日常や学校生活においてこの3年間に起きた大きな変化として、マスク着用や「3密の回避」などがしばしば取り上げられるが、家庭内で毎日実施された検温実践についてはまったくと言っていいほど研究の組上に上らない。

しかし、電子テクノロジーが子どもの日常生活をどのように変えるのかという問題意識からすると、電子体温計による検温が強制的に行われるようになったことはまさに生活の再編であり、そこにおいて子どもがどのような行為を行っていたのかを記録、分析することは重要な論点となりうる。

そこで本研究では、2020年から実施された、子どもによる電子テクノロジー利用実態に関する調査で得られた家庭内の様子を撮影した映像資料を用いて、子どもによる電子体温計を使った検温実践の記述を行う。

4~10歳の子どもがいる29家庭の映像資料を観察したところ、子どもが自分で検温するシーンが3つの家庭において見られた。本研究ではこの3家庭を中心に検討する。

2. 方法

2.1. 調査概要

本研究は、著者によりすでに報告された研究（伊藤, 2023a）と同一のデータセットから、調査対象児が自分で体温測定をしていたケースを抽出して分析を行う。

データセットの取得方法は下記の通りであった（以下、伊藤（2023b）の記述に基づく）。国内に居住する4～10歳の子どものいる家庭に、学校に配布されるフリーペーパーやSNS、口コミを通して調査の協力を依頼したところ、30家庭の協力を得ることができた。ただし、1軒の家庭からの協力が撤回されたため、29家庭のデータがデータセットを構成する。

データは協力家族がみずから撮影する、家庭内および近隣の映像に基づく。調査対象となった子ども（以下、「対象児」と呼ぶ）が休日で家にいる日を2日間自由に選んでもらい、それらの日の起床後から夕食前までの間、アクションカメラ（GoPro8）で1日につき少なくとも5時間以上の撮影をしてもらった。固定カメラとして最大2台を室内に設置してもらったとともに、子どもの主観的視点を推測するためのカメラとして1台を胸部にチェストハーネスにて装着してもらった。

このようにして最大で3台から得られた映像を時刻同期させ、1本の動画に統合した。最終的に、データセットには58本（29家庭×2日分、計約536時間20分、1家庭あたり平均約18時間30分）の動画が含まれる。

2.2. 分析対象

本研究で分析される3つの家族の構成と撮影日を下記に示す。なお、家族には撮影された動画を回収した順にIDを付し、以降ID名で呼ぶこととした。

①02家：父，母，対象児（7歳4ヶ月の女儿），弟（4歳5ヶ月）

撮影日：2021年9月25日，2021年9月26日

②06家：父，母，対象児（7歳3ヶ月の男児），2人の弟（それぞれ3歳11ヶ月，0歳9ヶ月）

撮影日：2021年12月25日

③11家：父，母，対象児（9歳8ヶ月の男児）

撮影日：2022年3月20日

撮影は2日間実施されたが、必ずしも両日も検温実践が観察されたわけではなかった。上記の撮影日には、検温が観察された日である。

3. 結果

02家において2日間とも、06家と11家においては撮影初日において、対象児自身による検温が観察された。観察された検温実践の概要を、表1に示した。

なお、対象児による体温計の操作ができなかったケースは観察されなかった。いずれの家庭でも撮影がなされたのは新型コロナウイルスの最初期の流行と全国的な休校措置の解除から1年以上経過した後であった。このことから、体温計の使用法についてはすでにインストラクションが済み、対象児自身も検温の経験を十分積んでいたものと推測される。

表1 3つの家庭における検温実践の概要

	02家	06家	11家
時間帯	朝食後	朝食後	朝食後
体温計の種類	電子式・腋下式	電子式・腋下式	電子式・非接触式
体温計の位置	ダイニング	リビング	ダイニング
記録簿の位置	冷蔵庫のドア表面	確認できず	和室
記録者	対象児	確認できず	対象児
口頭での報告	あり	あり	なし
検温の促し	母	母	母

3つの家庭において共通して見られた特徴として、第一に、体温計を用いた検温が朝食後に行われていたこと、第二に、使用されていた体温計が電子式であったこと、第三に、リビングルームやダイニングルームなど家庭内で家族が集まることのできる場所に子どもが容易に手に取れるよう体温計が置かれていたこと、第四に、母親が検温を促していたことがあった。最後の点として挙げられた促しについて、書き起こしからの抜粋を下記に示す。

【抜粋1 02家2日目】

母 ((キッチンに向かって移動中、対象児に背を向けながら)) 今日何日だっけ、今日体温やった？

対象児 ((テレビの前に置かれたソファに座る父の横に座り、リュックの中に物を入れる)) ちよっ

と待つ

【抜粋2 06家1日目】

母 (洗濯物を室内に干しているときに足元にあった棚から箱を取り出す) 熱測ったxxくん
対象児 あはかってない

【抜粋3 11家1日目】

対象児 そんじゃ
母 ((キッチンシンクで洗い物をしながら)) あ、
体温体温

なお、母親により促される前に対象児が率先して検温をしたケースも02家の撮影初日において観察された。

他方で、バリエーションのある側面も見られた。第一に、体温の記録である。02家および11家では検温をした対象児自身が記録簿に体温を記入していた。記録簿とは、学校から配布されていると思われるプリントやファイルである。体温だけでなく健康状況も記入できるようになっているものもあり、これも対象児が記入していた(11家)。

第二に、体温の報告である。対象児は3人とも検温を終えてから液晶画面に表示された数値を読み取っていた。02家と06家では対象児がその数値を大きな声を出して家族に報告する場面が見られた。さらに、02家では報告もまた母から促されていた(抜粋4)。11家では対象児は言語的な報告を母に対して行わないまま記録簿に記入していた。

【抜粋4 02家2日目】

母 何度？
対象児 さんろくてんろく ((冷蔵庫の横に貼ってあるペンケースからボールペンを取り出す))
母 xx
対象児 ふつう ((ボールペンで冷蔵庫の正面に貼ってあるプリントに記入))

【抜粋5 06家1日目】

対象児 ((脇から体温計を取り出して液晶を見る)) さ
んじゅうななど
母 はは

4. 考察

本研究では、4～10歳の子どものいる家庭の日常生活を観察した映像資料を用いて、子どもの日常生活の

中に検温実践がどのように埋め込まれているのかを記述した。3つの家庭において観察された子ども自身が検温する例に基づいてその特徴を検討する。

第一に指摘できるのは、子どもによる検温が家庭内で円滑に可能になるように組織された物の配置である。主張を先に述べれば、体温計や記録簿は子どもの手の届くところにあらかじめ置かれていたか、あるいは親が子どもの目の前に置いていたのである。例えば02家ではダイニングルームに接したキッチンカウンターの隅に、他の様々な道具(固定電話など)と共に置かれていた。また、06家では検温を促した母が棚から体温計の入った箱を取り出し対象児の前に置くことが見られた。計測のための器具が子どもにとってアクセスしやすい場所にあらかじめ置かれてあることは、手助けをされることなく検温をするための重要な条件の1つだと言えよう。扱いを間違えると危険な薬や高価なパソコンの置かれた場所について想像してみるとその対比に気づくだろう。恐らくそうした物は、子どもの手の届かない高い場所や、父母のプライベートルームに置かれるように思われる。体温計という装置と子どもとが容易に結びつくように家庭内の物理的環境が整えられることで検温実践が日常の一部となるのである。

第二は、コラボレーションとしての検温である。直前に指摘したこととは矛盾するようであるが、検温実践の開始が母による促しから始まる事例が観察されたことは、必須のルーティンとして子どもが習慣化しているわけではなかったことを示すだろう。検温が促されるのに対応して、計測結果の報告も行われることが観察された。これらのことが示唆するのは、体温計によって計測されたデータとしての体温とは、私的なものではまったくなく、むしろ家族(とともに、行政機関としての学校)が共有すべき公的なデータだという点である。まず、子どもの体温が平熱を超えていた場合、家族の日常生活実践は大きな変更を余儀なくされる。他方で、子どものケアを担う大人が発熱していたとしても、ケアという実践を止めるわけにはいきづらい。つまり、子どもは家庭内の大人たちにとってケアの対象として存在しており、その実践にとって有用なデータとして子どもの体温が扱われているのであると考えられる。自身で検温し、報告まで行う子どもは、家庭内における子どものケアという日常実践の対象でありつつ、それを組織化する一人のメンバーとして協働的に関与していたのである。

文献

伊藤崇 (2023a). フラットな音と遮断される回路：子どもとデジタル技術の関係をどう記述するか. 発達心理学研究, 34(4), 285-297.

伊藤崇 (2023b). 子どもの日常生活におけるスマートスピーカ使用の実態. 日本認知科学会第40回大会. 公立はこだて未来大学.

文部科学省 (2020a). 児童生徒等に新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応について
<https://www.mhlw.go.jp/content/000603970.pdf> (2024/7/19 取得)

文部科学省 (2020b). 令和2年度における小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校等における教育活動の再開等について (通知)
https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2024/7/19 取得)